

Title	日本古文化研究所報告, 第六 怡土城趾の調査(鏡山猛氏著) 第七 雪野寺趾發掘調査報告(柏倉亮吉氏著)
Sub Title	
Author	保坂, 三郎(Hosaka, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.209(707)- 210(708)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0210

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本書は先づ前記洞窟の箇々に就いて、構造・造像・後刻佛龕・銘刻その他必要なる事項にわたり詳細なる記述をなし、次にこれらの中本書の主題とも云ふべき北齊石窟群に就いて、その共通の特徴、他の場所他の時代の石窟との比較、その北齊窟と見られる所以等が論ぜられて居り、六十五の圖版・四十八の挿圖の他、附録として(一)響堂山彫刻零拾、(二)響堂山附近の歴史地理、(三)響堂山石刻録の三項が附加せられ、一に於ては破壊され他所(支那・本邦・米國)に將來せられた彫刻を圖版と共に記して、近年の拙劣な修補俗悪な塗抹を被らざる響堂山彫刻の倂を傳へ、二に於て附近の歴史地理を考察し、この地が北齊時代の二要地たる鄴と晉陽との重要な交通路に當り、有力者によつて石窟開鑿の行はれた可能性の考へられることを記して、北齊説を傍證し、三に於て洞窟の内外に石刻された經文・佛名・造像記・供養記・侍佛記・題記その他の銘刻が悉く輯録されてゐる等、頗る完備を極めてゐる。

支那佛教美術の考古學的研究に向つて、石窟寺院の調査が重要な價値を有してゐることは申すまでもないことであり、木造の伽藍が崩壊と重建を経て昔日の倂を止めない中にあつて、石窟寺院のみは獨り六朝隋唐の創建に近い姿の儘で今日に遺存してをり、その中に見出される佛像も、その數量に於いてまた規模に於いて、遙かに遊離した石佛等の諸像を凌駕してゐるのみならず、像相互の様式的聯關を考へ、また地方的性質を察するには、これを措いて他に好適な資料があるとは思はれないとは、濱田博士の本書に寄せられた序文の一節であり、尙博士は比較的良好に知られた雲崗・

天龍山・龍門等の石窟に對し、これまであまり注意されてゐなかつた此の響堂山石窟の調査は六朝美術の研究に重要な資料を寄與するものといはねばならないと記されてゐるが、蓋し本書の目的及び價値を端的に言盡されたものといへやう。

昨年來の戦火の中にあつても、大同の石佛石窟の保護されたことは報道せられたが、このあたりは如何であらうか。例へ戦火は免れることが出来ても、多少の破壊盗出は免れないのではないかと危まれ、その意味に於いて事變直前に出版せられた本書は、一面には遺憾な事ながら、一層その價値を増大してゐるかも知れない。併し今回の事變が東洋史上必然の運命である以上、多少の犠牲は美術の分野にあつても覺悟しなければならぬことであり、却て我々は事變後明朗化された新しき支那によつて、安全にして自由な調査研究の便宜が與へられ、本書にも一言せられてゐるやうな調査上の不便の一掃せられることを期待すべきであらう。(杉本忠)

日本古文化研究所報告

第六 怡土城址の調査(鏡山猛氏著)

筑前の怡土城は築造年代が明らかであり、且又それが我國最古の城址の一である爲築城史上に最も重きをなすものである。その上この城郭は吉備眞備なる史上の大人物が入唐後その得たる新智識により築城し、その目的が新羅征討の一の現れ(二頁)であるといふことを考へたならば、その國史上に於ける役割も亦極めて

大きいと云はねばならない。

この城址は極めて廣大な地域にわたる爲、從來の調査は小部分にのみ限られてゐたのであつたが、茲に鏡山氏によつて全般にわたつて城址の精密な實測圖が作られ、その廣袤・規模が明らかにされたことは蓋築城史上に怡土城の有する價値を築城史研究史上に有するものと云へやう。僅々三十頁許の記述ではあるが、怡土城の由來、沿革、文獻にまで解き及ばれてゐる。特に折込の怡土城址全圖をみる時我等は氏の勞の大なりしを察す可くもあるまい。

第七 雪野寺址發掘調査報告 (菅原亮吉氏著)

私は上野の博物館で奈良朝出土品の特別展覽會が催された時、この寺址から出土した遺物を始めて見た。其時この寺址出土の塑像片の前に我を忘れて立ちつくしたことを覚えてゐる。今この報告書の紹介を書くに當つて圖版を何回かひつくり返しながら「平野のたゞ中の丘麓に、砂白き清流の陽に聳え立ちたる寺院」(六六頁)の姿を想像してみた。そして心なき遺蹟の破壊さへも亦當然なんだらうかといふ氣にさへなり得た。

本書に於ては遺址としては塔址と、講堂址と推定せられる「第二遺址」とを中心に調査せられた結果を記述されてゐるのみであるから、今後の調査に期待せねばならぬ所も少くない。遺物としては調査中に出土したものは勿論、諸家に分藏されてゐるものをも探査集成し、極めて詳細に記述されてゐる。これは法起寺式伽藍配置の一寺址であるといふよりも、珍奇な遺物を出土した寺址で

あるから大々的な發掘よりも散佚せる遺物の聚成がより急務であつた爲ではあるまいか。そして其等遺物の總てにわたつて遺址との關係を求められてゐる點に私は最も敬意を表すものである。後論に於て著者は少い史料を考證し、斷片的な遺物を驅使して荒廢せる遺址に、雪野寺を復原再建し終つてゐる。著者の耳には落慶供養の讀經の音さへ聞えてゐるのではあるまいか。

(保坂三郎)

甲骨文 錄 河内通物志 (孫海波氏著)

河南博物館に所藏する處の凡三千六百版の龜甲獸骨文字のうち九百三十版を選択し、その一々に釋文を附し、必要に應じて考證をも加へたものである。印刷のよいことが此の種の本に特に望ましい所であるが、本書はその點では他の本に優つてゐやう。

然し特に大きい問題を提出してゐる所もない。近來甲骨學流行は支那に於て極めて著しいやうであるが、型にはまつた研究が多く、顯著な發達もみない。例へば相當長期間にわたつて用ゐられたらしいことは、橋本先生の曆法上の研究からも明らかな處であるが、その他からも指摘し得るのではあるまいか。書體の著しく自由なものがあるかと思へば形式化されたやうなものもみえる。又卜文に於ても同じことが云へるのではあるまいか。かういふ方向へも發展の餘地があるやうに思はれる。

ともかく本書は新資料を提供されたものであるから、斯學研究者は一本を備へ付く可きであらうし、甲骨學を瞥見せんとする人